

日本女子大学 学科紹介 ③



家政学部

住居学科

住居学科の現在

住居学科は、「ものをつくるのが好き」、「住宅や建築の専門家になりたい」、「インテリアに興味がある」という学生が多く、最近ではインテリアデザインや福祉住環境、まちづくりや環境共生にも興味をもった、幅広い人材が集まります。今年度は大学文化祭の出し物で学生が賞をとるなど、企画・実行力の面で実力を発揮しています。卒業生の活躍もめざましく、「日経WOMAN」S Woman of the Year 2006に選ばれた建築家・妹島和世氏を始め、多くの卒業生が今日も世界を舞台として活躍しています。

住居学科の数が全国的にみてもまだ少なかった頃に比べて、今は住居や住環境教育をかかげる学科が増えました。本学科はすぐれた住宅建築のデザイナーはもとより、暮らしのデザイナーを多く輩出する学科として知られています。外部評価で卒業生のコミュニケーション能力が高く評価されていることも特筆すべきことです。

今年からセンター入試を導入し、五人の募集枠に対して二七〇名の応募がありました。一般入試でも数年前まで十倍ほどの応募倍率を保っていました。今年度は受験科目を国語・数学の選択から数学指定に変更したために受験者が減りましたが、それでも倍率は五倍ほどでした。

専任教員は講師以上十名、助手四名の体制で、授業は講義・実習・演習・ゼミなど、多岐にわたります。また、学生が主体的に学ぶための環境を整えています。住居学科の教育は、入学してからの学生がどのように育っていくかを見通しながら教科カリキュラムを充実させています。教育改善会議を組織的に位置づけ、何度も議論を重ね、常に科目構成の評価と見直しを行っています。住居学科に関わる幅広い学問分野を、生活者の視点から大切にするという姿勢が、体感する・思考することから学習が始まり、社会環境・生活環境に関わる問題を総合的に理解・分析するスキルを養います。そして、問題提起する・デザインする。こうした学習を通じて、実社会に向けてすぐれた人材を生み出すことをめざしています。

各授業では、話が中心の古典的講義スタイルから、映像などビジュアルな教材を多用し、実践型の演習などを取り入れたものに進化しています。大学院の進学者も増え、学生はさまざまなコンペに応募したり、入選を果たしています。また、卒業後の進路

取り壊され、リニューアルされた樟溪館に移転し、設計スタジオとして一新されました。ノスタルジックな建物に、白色の内装がまぶしい設計室群は、オープン・キャンパスで訪れる受験生やその父母にも好評です。各分野の実験室も充実し、意匠系の実習室が移転、そして環境・設備系実験室や構造・材料実験室、バリアフリーデザインの実習室など、さまざまな実習室が充実しています。

住居学科の教育は、入学してからの学生がどのように育っていくかを見通しながら教科カリキュラムを充実させています。教育改善会議を組織的に位置づけ、何度も議論を重ね、常に科目構成の評価と見直しを行っています。住居学科に関わる幅広い学問分野を、生活者の視点から大切にするという姿勢が、体感する・思考することから学習が始まり、社会環境・生活環境に関わる問題を総合的に理解・分析するスキルを養います。そして、問題提起する・デザインする。こうした学習を通じて、実社会に向けてすぐれた人材を生み出すことをめざしています。

院生が国際的なワークショップに参加するなど、国境をいとも簡単に超える研究活動が行われています。一方、学部学生の多様な進路をサポートするために、建築環境デザイン専攻と住居環境デザイン専攻の二専攻制度を設け、学生は二年前期に自己の適性をみながら専攻を決定します。また、国際的な教育水準の認証制度であるABE (日本技術者教育認定機構) から二〇〇三年度には建築学の分野として認定されました。建築学分野として本学科が日本で最初の認定プログラムになります。女子大学としては認定一八〇余りのプログラムで唯一です。学生の多くがABEの認証を受けています。

現在、大学そのものに対する改革が迫られており、大学の大きな枠組みと学科のあり方を模索しながら、CD (大学等) の理念・目標や教育内容・方法を改善するための組織的な研究・研修などの取り組みに取り組みしております。情報共有し理解をいたすために情報発信を心がけたことを考えております。ホームページも活用していきますので、どうぞご覧いただき意見などをお聞かせください。

http://monji.wuac.jp/~yuihi/jyu/w/courses/04ahm (教授 石川孝重)

卒業後の進路

住居学科の就職率は、不況の社会情勢でも高水準を保っています。二〇〇五年度の実績でも、就職希望者のうち、就職または学業継続は八七%と高い数字を出しました。その業種は、建築・住宅関連企業へ決定したのが約六割、その他で四割となっています。本学および他大学への大学院進学希望も多く、卒業生が長く社会で専門職として活躍しているのが特徴です。

日々の改善そして将来の改革

10月28日(土)午後2時〜4時45分に、本学総合研究所人間生活科学研究センター第17回生活安全保障セミナー(生涯学習総合センター共催)「安心できる住まいづくり」が、目白キャンパスにて開催された。河内人間生活科学研究センター所長より挨拶の後、住居学科平田京子(安心な住まい)、セコムIIS研究所濱田宏彰氏(防犯)、国立保健医療科学院鍵直樹先生(シックハウス)、日本木造住宅耐震補強事業者協同組合安斎正弘氏(耐震補強)の講演が行われた。続いて住居学科石川孝重先生による本学の安全教育に関するさまざまな取り組みの説明があり、フロアとの質疑応答があった。

講演は安心な家づくりのために危険を知ること、住宅自体を強くする必要性、防犯のため、さまざまな工夫、シックハウス症候群とその原因物質、耐震補強の話があり、本学の紹介では早期防災教育のための絵本制作や学校教育での取り組みが紹介された。約50名の参加者は真剣にノートをとりつつ聴講され、市民と大学との距離が縮まった感がある。参加者からは熱心な質疑が行われた。市民啓発がまだまだこれからであること、またその必要性が強く感じられた。

FILE 13 総合研究所 人間生活科学研究センター

第17回生活安全保障セミナー

「安心できる住まいづくり」

～防災、防犯、シックハウス、耐震補強の実態と本学の安全教育～

住居学科助教授 平田 京子

10月28日(土)午後2時〜4時45分に、本学総合研究所人間生活科学研究センター第17回生活安全保障セミナー(生涯学習総合センター共催)「安心できる住まいづくり」が、目白キャンパスにて開催された。河内人間生活科学研究センター所長より挨拶の後、住居学科平田京子(安心な住まい)、セコムIIS研究所濱田宏彰氏(防犯)、国立保健医療科学院鍵直樹先生(シックハウス)、日本木造住宅耐震補強事業者協同組合安斎正弘氏(耐震補強)の講演が行われた。続いて住居学科石川孝重先生による本学の安全教育に関するさまざまな取り組みの説明があり、フロアとの質疑応答があった。



参加者から熱心な質疑が行われた

桜楓新報 第640号、桜楓会
2006年4月10日